元日紙面 世相の鏡

一字一筆　静岡の今 89

令和初の新春を迎えた。令和時代は昨年5月から始まっているが、本格的な「令和」のスタートはやはり新年からのような気がする。

さて、今年はどんな年になるのか。一つのヒントは、元日の全国紙朝刊一面にあることが多い。新聞は世の中を映す鏡だが、中でも一面は「その日の顔」であり、元日の一面は「一年の顔」が見えることが多い。もとより大事件・大事故の発生が優先だが、新聞各社は年頭紙面の一面に時代を先取りした企画記事などを競って載せる。その中に世相の「今」や「未来」が、見え隠れしている。

県内に配られた全国紙の元日紙面一面トップの見出しは読売「ゴーン被告無断出国 空路レバノン入り」、毎日「ゴーン被告レバノン逃亡」、朝日「『国会議員5人に現金』 IR汚職」だった。朝日も「ゴーン被告、レバノンに逃亡」を一面4段記事とした。まるでアクション映画のようなゴーン被告の逃亡事件と「バッジ（国会議員）の逮捕」は10年ぶりというIR汚職事件。令和時代は事件史に残るスタートとなった。

身の回りに視線を転じれば、川勝平太知事は年頭会見で「東京五輪・パラリンピックの年にスポーツで輝く県にする」と今年の抱負を表明。昨年のラグビーW杯に続いて、今年も県内に「熱狂」の予感がする。

ざわめく世相の中で、今年も静かにささやかな幸せを祈る「初詣」の群衆がいた。県内の初詣名所では静岡市・静岡浅間神社約30万人、三島市・三嶋大社約29万人、袋井市・法多山約9万人の参拝者（いずれも元日のみ）があった。県内約2800社の神社で新年に祈る人の数はおびただしい。

初詣で目立ったのはおみくじを求める若者の姿。インターネットやSNSの時代に、「吉」「凶」などと書かれたアナログな「お告げ」に一喜一憂している若者の姿がまぶしかった。

（前静岡県監査委員・富永久雄）

三嶋大社のおみくじ売り場＝三島市、全日写連・神尾一さん撮影